教育

教育の沿革　江戸時代の教育は藩学校と私塾・寺子屋で普及された。当時、徳川幕府は社会の秩序保持のため学問を奨励し、諸藩には藩学校が設けられ、上総には久留里（黒田三万石）の三近塾、大多喜（大河内三万石）の明善堂、鶴牧（水野一万五千石）の修来館、飯野（保科二万石）の明新館、佐貫（阿部一万六千石）の誠道館と、一宮（加納一万三千石）の崇文館があった。（千葉県史）

一宮における教育は一宮藩の藩学校を中心に行なわれ、私塾・寺子屋で名あるものはなかったが、近隣には長者の宇佐美瀧水、和泉の小林白水、中原の弓削鳴岳、高根本郷の諸岡文節、一松神社の狩野保村、保政父子等があったといわれる。

一宮藩は藤原鎌足の苗裔、遠江守加納久通が徳川家に仕えて功あり、一万石を禄され、久堅を経て遠江守久周になり一万三千石に加増、その後、久慎、久儔、久徴、久恒、久宜に至り明治四年廃藩となった。

藩主加納家は代々江戸詰定府（譜代大名）であり、藩士の多くは江戸に居住していたが、安政年間になり一宮に移住する者が多く、山鹿流兵法の大家といわれた十四代久徴は、一宮に学問所を開設、藩士の子弟はもちろん庶民にも入学を許した。

その後十六代久宜の時代、明治二年旧陣屋外郭の廃寺（建家二棟、七二坪、畳数一八五畳）を校舎として崇文館と名づけた。開設費は現石二百石であった。

崇文館の学科は文学は儒学、和学、数学にわかれ、武術は兵学、弓術、馬術、槍術、剣術、砲術、柔術、貝鼓、水泳術等の九科にわかれ、午前八時に始まり、正午に終った。

文学の試験は毎月一回藩主または老職の臨席で行なわれ、九等盤学問吟味と称し、縦横共に二尺五寸ばかりの襖様の物を作り、金、銀、紅、紫、黄、青、緑、白、黒の九等色の横桁に分画し、優等の者を金等とし以下黒等に至るまでの九等にわけ、試験書目、姓名をかき、それを掲げて行なわれ、黒等三度、欠席三回の者には父兄をよび戒めたという。

一年間の学校経費は、上野国新田郡他二郡より収入の三、〇〇〇石を以てあて、文武諸科教員への慰労金、学生の手当金、銃隊操練の費用、器械、演武場の修繕費に支出した。（千葉教育史、馬政功労十一代筆蹟）

加納久宜集によれば、

万延・慶応の交に於て水戸浪士の捕虜十三名の士を幕府の命を以て一宮藩に収容することとなり、これを容れる座敷牢を藩地に建設してこれに対する衣服・飲食すべての給養を約三年間継続し、維新の際に至って釈放の命があったが、その間十三人の浪士の中、漢籍に通ずる者は、諸科の書物を講義して教育なき者に授け、その保監の役に当る藩士等に対しては、尊王攘夷、報国盡忠の大義を演述して間接直接に士気を皷舞し、ために藩の文庫に貯蔵せざりし古今の書籍も、浪士等の要求に応じてこれを買い集め、藩地に送付した書籍も少なくなかった。

ということである。

しかし、これがために藩内の文学は一般に進歩すると同時に、勤王報国の大義名分等の主義・目的も藩士等の脳裡に注入せられたということである。

明治二年版籍奉還にともなって一宮県立学校となったが、明治五年九月廃校となった。

寺子屋・私塾は慶応末期より明治にかけて盛んになり、神職や寺院の僧侶等が主に指導者であった。当地域においても、玉前神社・南宮神社の神官は代々教え、寺院でもほとんど読書、そろばん塾を開いていたといわれ、その他では、大邨是正、塚本宗廣、関敬次郎、風袋、後藤等が教えていた。

千葉県教育史や他の文献により主なものをあげると、

中学校私塾　成智学舎　学制が施行されると共に私立中学校規程が設けられ「私宅ニアリテ中学ノ教科ヲ教フルモノ教師タルベキ証書ヲ得ルモノハ中学私塾ト称スベシ、其ノ免許ナキモノハ之ヲ学塾トス」と定められ、中学私塾として認められた。塾主塚本宗廣は一宮藩の教師より明治二年藩主加納久宜の命により開成校に入り、その後藩学校の教鞭をとり、英・数・漢学を教え、廃藩後、一宮西小学校の教員をしたが、地方青年の教育を志し、明治十一年認可されて、一宮町陣屋に中学校私塾成智学舎を開設した。明治十二年の生徒数は二十九名で、国語・英語・数学を教えた。その後、郷里土睦村の有志の懇請により移転し、片岡尚文（元鉄道院参事）糸井玄（元県会議員）藍亮（法学士）はこの塾から出たといわれる。

田中重則家塾（玉前神社神官）　慶応年間から明治八年頃まで一宮の宮敷で開き、読書・習字を教えていた。入学年齢は七才位、退学年齢は十三才位で教育方法は、一人ずつ口授する純然たる個別指導であり、休日は、一日・十五日その他お祝いの日であったといわれる。その子辰治は、明治二十年頃、同所で英語の教授をしていた。

白鳥義則家塾（南宮神社神官）　慶応年間から大正末頃まで、白鳥家にて習字・読書・そろばんを教えていた。同家の主婦の手で、附近の女子に裁縫、音曲（主として三味線）の指導を行なったこともある。

大邨是正家塾　明治十四年から同二十三年頃まで東浪見村大村で開所し、読書・習字を教えた。同氏は信嶺と号し、加納藩の剣道指南と崇文館の教導をつとめ、明治八年内務省勧農局に入ってその後十四年郷里東浪見に帰った。

小安亮仙（正満寺）　大正十年に開設、東浪見時習学校と称して英語その他を教え、当初二十九名の生徒を持っていた。

ところで明治維新後政府は、新しい施策として新教育体制を企画し、明治四年廃藩置県後、同年文部省を設立して翌五年八月学制を発布した。いわゆる近代教育は、これによって創始されたのである。

大政官公布によると、

「必ズ邑ニ不学ノ戸ナク家ニ不学ノ人ナカラシメン事ヲ期ス」「高上ノ学ニ至ツテハソノ人ノ才能ニ任カスト雖モ幼童ノ子弟ハ男女ノ別ナク小学ニ従事」「従来因襲ノ弊、学問ハ士人以上ノ事トシ、国家ノ為ニスト唱ウルヲ以テ、学費及ビ衣食ノ用ニ至ルマデ多ク官ニ依頼シ、之ヲ給スルニ非ザレバ学バサル事ト思ヒ、一生ヲ自棄スルモノ少カラズ、是皆惑ヘルノ甚シキモノ也、自今以後是等ノ弊ヲ改メ一般ノ人民他事ヲナゲウチ、自ラ奮テ必ズ学ニ従事セシムベキ様心得ベキ事」

とあり、義務教育は華族から農工商に至るまですべて一様に学ぶという制度で、近代国家の建設に政府の強い意欲があらわれている。

学校体系としては、全国を八大学区に分け、各大学区に一大学を置き、各大学区を三二中学区とし、各区に一中学校を設け、各中学区をさらに二一〇小学区とし、各区に一小学校を設ける整然たる三段階制であった。

全国の小学校開設状況をみると第一は従来あった寺子屋・私塾を全廃して小学校を設置したもの、第二は寺子屋・私塾等をそのまま存置して別に公立小学校を設け、しだいに吸収し整理したもの、第三は寺子屋・私塾等を学区制に基いて併合し、そのまま小学校に再編したもので、寺院等を借りたものが約四〇%、民家を借りたものが約三〇%であった。

当地域も、明治六年に綱田小学校、東浪見小学校が寺院を借りて開設し、一宮東小学校、一宮西小学校は、一宮藩の筆学所と崇文館を仮校舎として設立されたのである。当時学問は士分以上のものと考えられていたので、学校は設置されても就学者はわずかで、明治六年における就学状況は極めて悪かった。

（新治県は文部省年報による）

	学令人口		就学生徒		就学率
新治県	男	三四、八六七人	男	七、六九〇人	二一%
	女	三三、七七四	女	一、五三九	四
一宮西小学校	男	一六四	男	三八	二三
	女	一五四	女	五	三

全国は男三九%、女一五%、平均二八%である。

このような状況の下に発足した学制も、国内事情によって非現実的な点が多くあり、法の改正が度々なされ、明治十八年十二月森有礼が初代文部大臣に就任するにおよび「学校令」を制定し、これにより明治時代の学校制度がほぼ確立された。

その後、義務年限を四年間とし（三十三年）、更に六ヵ年に延長（四十年）され、尋常小学校六ヵ年、高等小学校二ヵ年の国民生活の実情に応じた教育が行なわれ、明治三十年頃より大正始めまでを、近代教育の整備期といわれている。

明治十四年における近隣学校状況（文部年報による）

学校名	所在地	設立年	訓導	助手	生徒数 男	生徒数 女	歳費金額
一ノ宮学校	一ノ宮本郷村	明六	三	五	二一四	一一一	九二五円八八八
東浪見学校	東浪見村	〃	一	一	六〇	〇	一五八・九八八
綱田学校	綱田村	〃		一	一八	五	六五・六〇八
上市場学校	上市場村	〃	一		六〇	八	一九九・四八一
寺崎学校	寺崎村	〃	一		四三	一〇	一一六・五二一
川島学校	川島村	〃十三		二	四一	四	一五三・八六一
北山田学校	北山田村	〃九	一	一	五九	六	一三一・二三五
七井土学校	七井土村	〃十三		一	三一	二	九五・五七四
金田学校	金田村	〃七	一		四三	六	一一七・九一一
岩沼学校	岩沼村	〃	一		二七	二	九八・〇二三
宮成学校	宮成村	〃十三		三	七九	五	一三四・五八〇
一松北学校	一松村	〃八	一		一三四	一三	一四九・二三二
一松南学校	一松村	〃八		一	四六	一	一五二・七八四
北高根学校	北高根村	〃七	一		三五	六	九五・六六八
高根学校	高根本郷村	〃七		二	七九	六	一六〇・〇四五
上ノ郷学校	上ノ郷村	〃九		三	四八	〇	一五九・八三二
下ノ郷学校	下ノ郷村	〃六	一	一	四七	二	一六一・九一二

当地域内の学校も過渡期の制度の混乱と共に学区や名称をかえ、東浪見小学校は明治十五年に綱田村外聯合により北小学校と改称し、更に明治二十年四月、東浪見尋常小学校と改称している。また一宮西小学校も明治十四年、公立一宮小学校となり（東小学校は附属となる）、明治二十年二月、一宮本郷村立一宮高等尋常小学校になった。

その後、同三十四年に綱田小学校と東浪見小学校が合併し、東浪見尋常高等小学校が設置され、三十三年には、一宮の桃園小学校（二十五年分校が独立したもの）が一宮尋常高等小学校と統合して一町村一校に整備された。

中学校及び実業学校教育については、明治十一年八月に県立千葉中学校が創立され、明治十九年中学校令が制定されて中等教育制度が確立された。

その後、同三十三年に大多喜中学校が設置され、当時千葉にあった「千葉県簡易農学校」が茂原に移転し、同三十四年千葉県立茂原農学校と改称された。私立としては茂原に大成館中学校があり、のち大正十二年に県立に移管された。

明治三十七、八年戦役後には、国勢の発展にともなって国民生活の著しい充実がみられ、中学校教育が盛んになり、明治末期より大正にかけて、中学校、女学校が急増された。

当町に於ては、大正二年私立一宮女学校が設立され、同十四年には、一宮実業学校（一宮商高）が創立された。

第一次世界大戦後、小学校教育、中学校教育共に充実され、昭和十二年の支那事変までは近代教育の拡充期といわれている。

その間学校の校舎も老朽化し、施設設備もおくれたので、新しい様式による近代校舎建築を要する時期となり、昭和十一年に一宮小学校が、同十三年には東浪見小学校が全面的に新改築し、現在の校

舎になっている。

昭和十二年七月、支那事変を機に戦時下教育という考え方が強く示され、昭和十六年、皇国民育成の目標から小学校が国民学校に改められ、中学校は配属将校による軍事教練の強化、勤労作業による錬成等がとり入れられた。

戦時下の学校の中で特殊な任務を果たしたものは青年学校であり、これは大正末より昭和の始めに小学校に併置された補習学校及び青年訓練所を統合したものである。

当町に於ても東浪見村青年学校、一宮町青年学校がそれぞれ小学校に併置され、義務制であり、補習教育より軍事教育が実質であった。戦時下の教育はこのようにして八年間にわたり、ことに昭和十八年ごろから非常事態のもとにあって圧縮され、学力は著しく低下した。

昭和二十年八月、終戦と共に教育の民主化がさけばれ、同二十一年十一月三日新しい憲法を制定、翌二十二年五月三日施行されるにともない政府は教育刷新委員会を設けて、制度及び内容の改革に着手し、昭和二十三年教育基本法を制定して、教育制度の大改革を行なった。

「教育基本法」をみると、

第一条

教育は人格の完成をめざし平和的な国家及び社会の形成者として真理と正義を愛し、個人の価値をたっとび勤労の責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

第三条

すべて国民は、ひとしくその能力に応ずる教育を受ける機会を与えられなければならないものであって人種・信条・性別・社会的身分・経済的地位又は門地によって教育上差別されない。

第四条

国民はその保護する子女に九年の普通教育を受けさせる義務を負う。

第五条

男女は互に敬重し協力し合わなければならないものであって、教育上男女の共学は、認められなければならない。

とあり、新教育の理念が明らかにされた。

すなわち、旧来の複雑多岐な制度を改め、六三三四の小中高大学校の単純化を図り、同時に義務教育年限六ヵ年を三ヵ年延長し、九ヵ年とし、男女の差別をなくして男女共に平等の立場で教育を受けられるよう共学制を実施した。

また教科書についても従来の国定制度を改め、検定制度を採用し、各地方の実情や特色に応ずる教育が行なわれるようになった。

明治以来教育の中央統制機関として文部省の行政的権限は大きかったが、戦後教育行政の地方分権等に留意し、昭和二十三年教育行政機関として、都道府県教育委員会が、同二十七年市町村教育委員会が設置され、自主的に教育事務が管理執行されるようになった。

昭和二十二年の学制の改革に伴い、東浪見・一宮両国民学校が、

それぞれ小学校と改称し、青年学校は廃校され、新たに、東浪見中学校・一宮中学校が設立された。当時は戦後の経済及び社会思想の混乱期であり、新しい中学校の建設には相当の努力がはらわれた。

その後同二十八年に一宮町と東浪見村が合併し、新たに一宮町となり、翌二十九年から三十年にかけて、長生村内の船頭給・新地・宮原区がそれぞれ一宮町に編入され、学区の変更と生徒の自然増加により、施設・設備の充実がなされた。

三十三年には町村合併当時より問題であった東浪見中学校と一宮中学校の統合がなり、新しい一宮中学校が設立され、校舎や設備も近代化されて飛躍的発展をとげた。

明治六年学制が発布されてから約九十年、就学率二〇%から一〇〇%になり、寺院をかりた時代から近代的体育館ができ、義務年限九ヵ年を卒え、更に高等学校進学希望者の多数を想いあわせる時、隔世の感をいだかせる。

一宮小学校　明治六年十二月十七日、一宮本郷村二、九四二番にあった旧一宮藩の学問所崇文館を仮校舎として開設し、一宮西小学校と称した。

創立当時の学令児童数は男一六四名、女一五四名あったが、学校に対する理解がなく、就学児童は僅か男三八名女、五名計四三名であった。開設と共に塚本宗廣、田中正路の二名が訓導に任命され、塚本は読書課を、田中は習字課を教えたといわれる。

翌七年に法令改正があり、小学校を一等、二等、三等の三段階にわけ、一等級校には監視訓導をおき二等級以下の学校を監督することになり、本校は一等級学校に認められた。当時本校下の組合校は一宮東校・東浪見校・綱田校・上市場校・寺崎校・下之郷校・中原校・椎木校であった。（他は開設されていない）

翌八年九月、崇文館の払い下げをうけた初田清ほか三〇名が、一宮西小学校校舎として寄附をし、本校舎となった。

学校一棟寄附願

一、旧一宮県崇文館

一宮西小学校　但建坪七十二坪

此代価見積凡五十円

右者先般御達之趣モ有之仕候処御拂下相成候得共書面之通リ従前ヨリ小学校ニ相用罷在候義故私共協力仕右建家並附属之建具共悉皆寄附仕教育之一助ニ仕度奉存候間御届被成下度此段奉願候以上

明治八年九月五日

第七大区四小区長柄郡一宮本郷村住士族

石田教四郎　木村　ゑい　田中　正路　秦　乙松
竹内　嘉吉　川島　利平　中村蒼一郎　石川　利二
塚本　宗廣　坂口　鮭蔵　奥田　高直　中村　一胤
中尾　中　鈴木多喜男　鵜沢　数夫　郡山　千巻
中村　勇　城所忠吉郎　小川　功　木村　永孚
田母神吉顕　小泉　重正　深津　経綸　大久保高方
吉川　豊秋　木村蔵三郎　原　三蔭　丸山　幹夫
小池　要

右惣代

初田　清㊞
永田　善以㊞
国區副戸長
関五郎右衛門㊞

千葉県令　柴原和殿
書面之趣奇特之儀ニ付聞届候事
明治八年九月廿二日
千葉県令　柴原和

その後、同十四年十一月、公立一宮小学校と改称（東小学校は附属となる）、同二十年二月一宮本郷村立一宮尋常高等小学校となり、同二十五年分校が独立して桃園尋常小学校が設置され、三十三年十二月桃園尋常小学校を合併した。

当時の主な事項を沿革誌に拾ってみると、創立時より使用していた校舎が老朽し、新築につき協議していたが、明治十八年三月に村会の議決を得、建築委員に浅野長十郎他九名がなり、同年十二月着工、翌十九年八月、工費三、七五六円、間口一四間、奥行一四間五尺、総坪数一七六坪、二階建中庭付の近代的校舎が落成した。当時とすれば近代的な珍しい建物で、参観者は連日列をなしたといわれている。

寄附帳によれば、

百五十円　田中郁郎　　百三十円　辻茂吉
百二十円　斉藤定四郎　　百十円　渡辺庄助
百五円　中村吉兵衛　　八十円　福島勘四郎
七十五円　秦桂之助　　五十円　浅野長十郎
（以下略）

とあり、寄附金合計三、四三八円三三銭であった。

学校運営費については、全国的に捻出にことかき、本県は学資金規則を布達し学校基金を募り、それを貸付けして利息をとり、授業料とあわせて運営費に支出していた。

明治二十五年三月、一宮町会で定めた小学校授業料徴収規定によると、

第一条　本県令第二十二号町村立小学校授業料規則ニ依リ授業料ノ額ヲ定ムル左ノ如シ
一、高等小学校　一ケ月金拾五銭
一、尋常小学校　金七銭
第二条　一家ヨリ同時ニ三名以上入学スルトキハ其ノ弐名ハ全額他ハ壱名毎ニ半額ノ授業料ヲ徴収ス
（以下略）

明治十三年に学務委員の選挙が行なわれ、浅野長十郎、田中重則、渡辺庄助の三氏が当選し、その後、宮重半次郎、斉藤孝祐、渡辺圭三、高原太吉、高梨長助、斉藤俊郎、石田教四郎、斉藤勝司郎（以下略）の各氏が就任した。

明治時代に於ては、施設・設備共に過渡期にあり、比較的充実していた一宮小学校に近隣町村の学を志す者が集まり、学校設備の整備されてきた明治末期に於ても、四十三年尋常五〇名、高等一三名、四十四年尋常三七名、高等九名が通学していた。

学区内状況推移表

	児童数 男	児童数 女	児童数 計	学級数	教員数	学区内人口	同世帯数
明治 6	38	5	43				
17	254	120	374				
34	215	130	345				
43	329	324	653	12	12	5,211	869
大正 5	324	325	647	12	14	5,078	858
10	356	324	680	12	15	4,972	876
15	327	323	650	12	14	5,187	910
昭和 5	318	304	622	12	15	5,135	925
10	318	334	652	12	14	5,153	922
15	379	353	732	14	15	5,121	1,020
20	480	497	977	18	22	5,610	1,210
26	474	509	983	20	24	6,644	1,325
30	608	625	1,233	24	30	8,034	1,589
33	685	622	1,307	27	31	8,674	1,746
38	445	466	911	22	27	8,424	1,789

一宮小学校予算額年次表

年度	学校費	町費
明治39	2,823円	6,659円
44	4,155	9,869
大正 5	4,395	
10	13,541	
昭和 5	13,450	45,068
11	12,620	76,628
15	13,819	35,034
20	5,479	70,936
27	1,069,800	11,597,600
31	1,494,600	26,811,540
35	2,013,460	40,894,229
38	3,119,000	100,145,000

（円以下切捨）

大正より昭和の始めにかけて、教育内容の充実期といわれ、大きな変動はなかった。珍しいものを列記すると、

大正四年七月十五日、本日より講師加納久憲により児童の水泳を開始す。

大正十二年五月五日、第二時限後海岸に於て凧揚会をなし盛会なりき。

大正十二年九月一日、午前十一時五十分、激震あり校舎の動揺甚だし、引続き強震熄まず、人心恟々たり。

九月二日　強震熄まず、本日より八日まで臨時休業を行う。

昭和十一年、明治年間に建築した校舎を改修し使用してきたが老朽の為使用に耐えず、校庭を拡張すると共に、旧校舎を移転改築し、二階建校舎及び講堂を新築した。この様が現在の校舎である。

支那事変が始まると共に（昭和十二年七月）学校教育も戦時体制になり、昭和十六年、法令改正により一宮国民学校と改称、時局の進展にともない、勤労作業が多くなり、学力はいちぢるしく低下した。

昭和二十二年学制の改革により、六三制が実施され、一宮町立一宮小学校と改めた。

戦後、文部省に於ては学校給食を奨励し、当校は同二十四年五月十九日、近隣の学校にさきがけて副食の給食を実施、翌二十五年十二月、給食優良校として全国学校衛生大会で表彰を受け、記念して工費五十万円でランチルームを新築した。

その後、船頭給、新地、宮原区の編入や、児童の自然増加によって教室が不足し、昭和三十年、二階建四教室、一二〇坪を新築、現在に至っている。

歴代校長（桃園尋常小学校合併後）

岩本　幾雄	明治三十三年十二月～〃　四十四年四月	
伊藤　憲文	〃　四十四年五月～大正　二年三月	
山田　精吾	大正　二年四月～〃　十年三月	
阿部　滋金	〃　十年四月～〃　十四年三月	
石橋嘉平治	〃　十四年四月～昭和　三年九月	
金坂　武	昭和　三年九月～〃　八年三月	
中村　博	〃　八年四月～〃　八年九月	
中村　秀吉	〃　八年十月～〃　十二年三月	
山田徳次郎	〃　十二年四月～〃　十三年三月	
鹿間庸之助	〃　十三年四月～〃　十六年三月	
井口　毅	〃　十六年四月～〃　二十三年三月	
御園生良三	〃　二十三年四月～〃　二十五年一月	
中村　耕	〃　二十五年一月～〃　三十五年三月	
武田　亮太	〃　三十五年四月～現在	

一宮小学校PTA

昭和二十二年発会式を行ない、一宮小PTAが結成された。

歴代会長

清水　孝平	昭和二十二年度
遠藤　貞蔵	〃　〃
近藤　三郎	〃　二十三年度
小高倉之助	〃　〃
高原　朝義	〃　二十四年度
岡田　栄久	〃　二十五年度
田中　定治	〃　二十六年～三十年度
荒井　忠光	〃　三十一年～三十三年度
船橋　周治	〃　三十四年～三十六年度
秦　守彦	〃　三十七年～現在

一宮東小学校　明治六年の学制の発布により、旧一宮藩の筆学所を仮校舎として創立され、翌八年一月上之原に移転した。同十一年八月一宮西小学校と合併し、附属一宮東小学校となった。

その後、同一予算内に於ては分校は認められなくなり、同二十五年独立し、一宮町立桃園小学校と改称、西中之原に移転した。

明治に於ける学校教育の過渡期で法令は度々改正され、明治三十三年十二月、一町村一校の整備により一宮尋常小学校と合併し廃校となった。

網田小学校　明治六年十二月に寺院を仮校舎として開校され、訓導には鵜沢良太郎が就任した。

同九年七月に新校舎を建て、三十四年五月、東浪見小学校との合

併により廃校となった。

その後、片岡周作、鵜沢外八、宇佐美廉吉、関甚吉、関和知が訓導に就任した。

東浪見尋常小学校　明治六年十月十八日東浪見村大村正満寺の本堂を仮校舎として創立され、同九年九月中旧郷倉に移転した。訓導には関信良が任命され、学務委員には鵜沢勘十郎、三枝半四郎がなり、その後、関祐民、富塚弥吉、秋場市郎兵衛、秋場一郎、長谷川要、長谷川進が就任した。

明治十五年網田村外四ヵ村聯合により北小学校と改称、二十年四月再び東浪見尋常小学校と改名した。同年七月補習科を設け、同二十五年八月、新築校舎に移転した。

当時は学令児童は男一七五、女一四八名であったが就学児童はわずか男七八、女二九であった。

学校運営費は、教育基金の貸付け利息と授業料をもってし、不足の時は村の補助金で賄っていた。

教育費予算をみると、

明治二十二年　一八〇円

教員給料	一五六円（教員一人月一〇円、一人月五円）
小使給料	六円（一人月五〇銭）
備品費	四円（書籍器具代）
消耗品費	六円（薪炭・茶代・墨紙代）
修繕費	八円

明治二十八年　二三四円

教員給料	一九二円
小使給料	六円
教員恩給基金	一円（正教員給料の百分の一）
雑　給	六円
備品費	一二円
消耗品費	一二円
常時修繕費	五円

となっている。明治二十五年よりは、正教員に恩給基金積立が行なわれることになった。

その後法令の改正により、網田小学校と合併し、一村一校に整備され、新しい東浪見尋常小学校になった。

東浪見小学校　明治三十四年五月一日に網田尋常小学校と東浪見小学校が合併し、新たに東浪見尋常小学校が設立され、六月に高等科の併置が認められた。

創立当時の在籍児童数は、尋常科が男一二一名、女五一名で高等科は四三名であった。

九月三十日付で校長に宮田録が任命された。認可された写をみると、

今般小学校令第九条ニ依リ知事ノ認可ヲ得東浪見村東浪見尋常小学校及び網田尋常小学校ノ二校ヲ廃シ更ニ一校ト為シ位置ヲ東浪見村大字東浪見字苗代二千七百五十六番地二千七百三十三番地及二千七百五十番地二千七百五十二番地二千七百五十三番地二千七百五十四番地二千七百五十五番地ニ定ム

明治三十四年五月一日

千葉県長生郡長　川頼　渡

明治末期により大正にかけての推移を学校沿革誌にみると、次のとおりである。

明治三十六年には高等小学校校舎の建築が行なわれ同三十七年一月落成した。建物は和洋折衷二階建、間口八間、奥行四間、坪数六十四坪の近代的なものであった。

三十九年には三月十二日に尋常一、二年の健康診断が行なわれ、村長立会いの上で、医師秋場寛斉が行なった。

翌四十年十月十七日には一宮海岸で、東浪見・太東・一宮・八積・一松の五町村六学校による聯合大運動会が催され、盛会であったといわれる。

当時の修学旅行をみると、三十九年には成田町へ、四十年には東京上野勧業博覧会を見学、今日と比較するとおもしろい。

明治四十三年四月、佐久間訓導の告別式が行なわれ、尋常二年以上の生徒は一宮停車場まで見送る。当時東浪見駅は開設されておらず、参考までに鉄道状況をみるに、明治三十年四月に大網～一宮間が開通され、更に三十二年十二月に大原まで延長された。

停車場(駅)の開設状況をみると、三十年四月には本納・茂原・一宮が開設、三十二年十二月太東・長者町・大原が開設され、東浪見駅はおくれて、大正十四年十二月設けられた。

大正十三年には皇太子殿下の御成婚を記念して東浪見村教育後援会が創立され、会員は二三八名、事業として、裁縫室の新設、御成婚記念陛上聯合運動会がなされた。

その後生徒の増加にともない校庭が狭くなり、また教育環境の問題もあり、昭和十一年二月村会の可決を得て、校地を東浪見村字大六天一、七一〇番地に移転、同十三年校舎建築に着工、同年十一月完成し、現在にみる立派な校舎が新築された。

戦局の進展とともに昭和十六年国民学校と改称、戦後二十二年学制の改正により、再び東浪見小学校になり、更に町村合併により一宮町立東浪見小学校となり現在に至っている。

歴代校長

宮田　録	明治三十四年十月～明治三十八年十月	
西周政次郎	〃	三十九年一月～〃　四十五年四月
大多和　馨	〃	四十五年四月～大正　五　年四月
太田　泰助	大正　五　年四月～〃	九　年三月
高橋　政一	〃	九　年四月～〃　十三　年三月
大和　祐久	〃	十三　年四月～〃　十四　年三月
田中　米寿	〃	十五　年四月～昭和　二　年三月
森　孝	昭和　二　年四月～〃	五　年三月
中村　彌一	〃	五　年四月～〃　八　年三月
足立　清	〃	八　年四月～〃　十　年八月
清水　孝平	〃	十　年九月～〃　十四　年四月
中村　耕	〃	十四　年四月～〃　十七　年三月
塚本　宗臣	〃	十七　年四月～〃　二十二年三月
吉野　功	〃	二十二年四月～〃　二十七年三月
久我　信雄	〃	二十七年四月～昭和三十一年三月
白鳥　徳衛	〃	三十一年四月～現在

学区内状況推移表

	児童数 男	児童数 女	児童数 計	学級数	教員数	学区内人口	同世帯数
明治35	121	51	172		4		
大正8	146	143	289	6	6	2,387	417
13	152	161	313	6	6	2,494	425
昭和5	166	192	358	6	6	2,370	430
10	200	170	370	6	6	2,338	430
15	192	165	357	7	8	2,347	427
21	234	192	426	10	10	3,097	593
26	213	170	383	11	15	2,953	537
30	172	193	365	11	14	2,953	537
35	174	182	356	9	12	2,896	495
38	156	143	299	9	12	2,602	489

東浪見小学校予算額年次表

年度	学校費	町村費
明治34	286円	円
39	1,196	
44	1,659	
大正10	5,505	
昭和5	6,216	13,994
11	6,962	13,227
15	8,190	16,015
21	2,879	33,572
27	479,580	5,487,573
31	643,100	26,811,540
35	990,500	40,894,229
38	1,448,000	100,145,000

(円以下切捨)

田中　広俊	〃	二十六年度　東浪見村PTA
秋場　孝	〃	二十七年度　〃
秋場　久雄	〃	二十八年度　〃
長谷川勝夫	〃	二十九年度～三十年度　東浪見小PTA
高梨　一郎	〃	三十一年度～三十三年度　〃
相　重知	〃	三十四年度～三十五年度　〃
秋場　寛	〃	三十六年度　〃
秋場　儀一	〃	三十七年度～現在　〃

東浪見小学校PTA

昭和二十三年十二月、東浪見村PTAが創立され、当時東浪見小学校PTAはなかった。その後昭和二十九年四月、東浪見村PTAを解散し、東浪見小学校PTAが発足した。

歴代会長

長谷川貞雄	昭和二十四年度	東浪見村PTA
峰島　峰司	〃　二十五年度	〃

東浪見中学校　昭和二十二年学制の改革にともない、同年五月

東浪見村立東浪見中学校が設立され、同中学校は五月十日、東浪見小学校講堂を仮校舎として開校式を行なった。

校長には塚本宗臣が就任し、教員としては、鈴木東湖、仲野孝、田中隆、米倉巌、峰島ミチが任命された。

新校舎を建築するにあたり、敷地と財源について相当論議されたが、昭和二十四年四月村会・部長会に於て、東浪見小学校校地内南東側に敷地を決定、建築原案作成委員に長谷川貞雄村長、長谷川一、石野一雄、田中広俊、増田安徳校長が就任した。新校舎はその原案により、同年九月着工、翌二十五年三月、総坪数二六二坪、総工費四一八万円で完成した。

昭和二十八年十一月町村合併と共に、一宮町立東浪見中学校と改称、その後小規模学校における教育内容の向上と、施設、設備の充実について再々協議されたが、町議会及び学区民の賛成を得て、昭和三十三年七月三十一日、一宮中学校と統合し、発展的に解消した。

同年八月一日一宮町立一宮中学校東浪見校舎となり、翌年三月三十一日、完全に廃校された。

生徒数の推移は、昭和二十六年度　一六七名、同三十年度　一八二名、同三十三年度　一五一名であった。

学校予算

	二十六年度	三十二年度
職員給	七一、〇〇〇円	一四六、二九〇円
需用費	三三六、五〇〇	二六九、九一〇
営繕費	一五、〇〇〇	五〇、〇〇〇
その他	八、〇〇〇	一四、八〇〇
計	四三〇、五〇〇	四八一、〇〇〇

歴代校長

塚本　宗臣　昭和二十二年四月～昭和二十三年四月
森　芳男　〃　二十三年四月～〃　二十四年三月
増田　安徳　〃　二十四年三月～〃　二十六年三月
高山　良夫　〃　二十七年四月～〃　二十八年二月
久我　信雄　〃　二十八年二月～〃　二十八年三月（兼務）
藤乗喜代二　〃　二十八年四月～〃　三十年三月
白鳥　徳衛　〃　三十年四月　～〃　三十一年三月
大野　孝　〃　三十一年四月～〃　三十三年七月
東浪見中学校ＰＴＡ
昭和二十二年七月十日、東浪見中学校ＰＴＡの結成総会が行なわれ、会長に峰島峰司が選出された。

翌二十三年十二月十三日、東浪見村ＰＴＡが結成されたので発展的に解消、再び昭和二十九年、東浪見村ＰＴＡが解散し、東浪見小、東浪見中とわかれるに及び、東浪見中学校ＰＴＡを結成、会長に秋場久雄が就任し、昭和三十二年緑川丈一が会長に就任し、その後中学校統合により解散した。

一宮中学校（統合前）　昭和二十二年学制の改革により新しい教育法が公布され、当町においても同年五月一宮中学校が創立された。五月十日一宮小学校の教室を仮校舎として開校式が行なわれ、入学

者は一学年一七三、二学年七三、三学年四〇名計二八六名であった。

当時任命された教員は校長金子一郎、教諭細矢忠、久我信雄、酒井敬、河野暢夫、佐瀬正夫、長谷川洋、高梨寿満子の八氏であった。

町当局においては、ただちに新校舎建設計画にとりかかり敷地と校舎建築財源等について論議の末、一宮町西門前台にある一宮実業学校後援会所有地に決定、校舎については一宮海岸兵舎の一部を移築し、他に一棟新築することになり、同二十四年三月第一校舎及び改築校舎が落成した。総坪数は二三五坪である。

その後生徒の自然増加にともない二十八年三教室八三坪が増築され、更に三十年音楽教室四六坪が新築された。

その間、二十九年四月に船頭給が、翌三十年四月に新地、同年九月に宮原部落が長生村より一宮町に編入され、同部落生徒が通学するようになった。

同三十三年七月三十一日、東浪見中学校との統合により廃校し、同年八月一日一宮中学校一宮校舎となり、翌三十四年四月一日、統合による新しい一宮中学校が設置された。

生徒数推移表

年度	男	女	計
23	211	210	421
25	223	235	458
27	188	213	401
28	195	227	422
29	243	261	504
30	280	264	544
31	305	274	579
32	278	291	569
33	237	279	516

歴代校長

金子　一郎　昭和二十二年四月～昭和二十四年四月
江沢　昌　〃　二十四年四月～〃　二十六年四月
武田　亮太　〃　二十六年四月～〃　三十三年七月

一宮中学校ＰＴＡ
昭和二十二年八月一日発会式を行ない一宮中学校ＰＴＡが結成された。

歴代会長

久我捻太郎　昭和二十二年度～昭和二十四年度
内山忠七郎　〃　二十五年度～〃　二十七年度
清水　孝平　〃　二十八年度～〃　二十九年度
宮本　正一　〃　三十年度　～〃　三十一年度
秋山　孝祐　〃　三十二年度
田中　定治　〃　三十三年度

一宮中学校（統合後）　一宮町立一宮中学校は、昭和三十三年八月一日、東浪見中学校と一宮中学校を統合してあらたに前一宮中学校の位置に設立された。統合当初は教室不足で、東浪見校舎・一宮校舎とわかれて授業が行なわれたが、翌三十四年四月一日より両校舎を廃して同一校舎で授業が行なわれた。

初代校長には武田亮太が就任し、職員には、牧野実（教頭）、吉野主税、本間康一、植草菊枝、長谷川達雄、志田豊子、大石総雄、池田篤、田中自治夫、白鳥美智子、粒良畊三、長谷川美智子、市原善彌、有賀栄子、江沢球子、大野孝、糸井弘、河野正明、市原義武、

寺田徳次、沼田千鶴、長嶋知子、松崎大江、斉藤善子、木原文夫が任命された。

統合の目標である施設の近代化と設備の充実については新町建設五ヵ年計画で認められ、同三十三・三十四年度に理科教室・普通教室を含む鉄筋二階建二六〇坪を新築、三十六年には一五八坪、翌三十七年には調理教室四八坪が完成し、続いて三十七年七月、体育館に着工し、同年十二月総工費一、三五五万円、鉄骨円型、二一六坪の近代的体育館が竣工した。

歴代校長

武田　亮太　昭和三十三年八月～昭和三十五年三月

小高　精司　〃　三十五年四月～現在

生徒数推移表

年度	男	女	計
34	300	355	655
35	373	388	761
36	446	452	898
37	469	464	933
38	412	393	805

一宮中学校ＰＴＡ

昭和三十四年四月結成された。

歴代会長

中村孫右衛門　昭和三十四年度～昭和三十五年度

向井　十郎　〃　三十六年度～三十七年度

吉野　正三　〃　三十八年度

一宮女学校　組合立一宮女学校は、大正二年九月元子爵加納久宜他近隣町村有志一六三名により、旧葉煙草専売局の建物を仮校舎として開設された。（現在一宮商業高校敷地内）

当初生徒数は僅か一九名で、修業年限は三ヵ年、国語・裁縫・生花・茶道・家事等を教えたが、後、地理・歴史・算術・理科・英語等を加えた。

校長には、東金高女校長・千葉高女校長を歴任した小池民次を迎え、職員には塚本道臣、浅野益代、山田精吾、糸井邦治、水野徳三郎、星野定助、往古常次郎、松本礼禧、斉藤武夫、関いち、堀内たき、矢部とく、立野千代、白井久子、金坂千代、講師として加納久宜夫人、小池元、校医には斉藤利一郎が就任した。

開校と共に同校顧問として、加納久宜、秦桓、渡辺圭三、高梨金次郎、中村祐吉郎、浅野周助、斉藤勝次郎、宮重半治郎、宮重謙輔が就任し、学校運営にあたった。

翌三年五月、旧一宮区裁判所建物に移転、同四年、加納久宜他四八名の出資金一、九〇〇円をもって寄宿舎（二階建）が完成した。

当時出資者に対し、当初年三分、その後年六分～八分の配当を行ない、寄宿舎の賄費より剰余金を生んだことは、類例がないといわれている。

教育方針や心得をみると、

「女子ハ家庭ノ風紀ヲ維持シ、平和ノ中心トナリテ家道ヲ進メ、マタ女子ノ養育教育ノ天職ヲ完ウシ施テ民風ノ作興ト国運ノ発展トニ

貢献スルトコロナクテハナラヌ」

「針ヲ使用スル前後ニハ之ヲ数エテソノ数ヲ合ウベシ、

箒ヲ用フルトキハ、箒の穂先ヲ数回転シテ穂先ノ薙刀形ニナラヌヨウニスベシ、仮ニモ箒ノ穂先ヲ曲グルガ如キコトナカルベシ、

飯ヲ移ストキハ、釜マタハ飯櫃ノ内部ヲ掻キ回スコトナク、且ツ一粒モ外ニ落サヌヤウニ注意スベシ、マタ炊キタテノ飯ト冷飯トヲ混ズルコトナカルベシ」

毎朝日課として、昭憲皇大后の御歌

「金剛石もみがかずば、玉の光はいでざらん

人も学びてのちにこそ、真の徳はあらわるれ

時計の針のたえまなく、めぐるが如く時の間も

ひかげおしみてはげみなば、いかなる業かならざらん」

を詠じ、毛筆の日記を毎日記させ、同校経営の中心であった、加納久宜夫人、小池校長の人格と、質実貞淑、良妻賢母の教育がしのばれる。

その後大正末期より、近隣に学校が設立され、入学者は減少し、経費負担が増加したので、昭和二年十二月、一宮、東浪見、太東、土睦、一松、八積、高根木郷、白潟、東村による組合立一宮女学校に改め、校長には農学士宮沢錦雄が就任した。

当時の同窓会報に、

「校内に電話ができました。番号は四十七番です。電話ができては耳が不自由な私には務まらないと言って小使の渡辺市次郎爺は暇を取って帰った。一宮町の斉藤春吉爺が代って小使になった。」

という一文がある。当時の世相のしのばれる文章である。

昭和三年三月の卒業生が九名を数えるにおよんで、一宮町議会は廃校に決定したが、在校生の処置について協議の結果、現在生徒の卒業するまで存続し、昭和八年三月、廃校する事に決定した。

その間、同校の校風をしたって市原郡・山武郡・夷隅郡から入学し、卒業生は約六〇〇名を数えている。

卒業生推移

年　度	人員
第１回（大正４年）	16
第２回（〃　５年）	31
5	38
8	45
11	52
12	51
13（昭和２年）	39
組合立 1（昭和３年）	9

（現存する卒業生は、年一回、在学当時をしのんで同窓会を開催している）

一宮商業高等学校（実業学校）　千葉県立一宮商業高等学校の前身私立一宮実業学校は大正十四年五月、一宮町の有志により創立された。

創立当時を学校沿革誌にみると

「本校ノ創立ハ大正十四年五月ニシテ小学校ノ教科ヲ卒ヘタル者ニ対シ地方ニ適切ナル学科ヲ撰択シ実業ニ関スル知識技能ヲ授クルト同時ニ品性ヲ陶冶シ、優秀ナル公民ヲ養成スルノ目的ヲ以テ設立シタルモノナリ。

大正十四年四月十七日、田中周、渡辺脩三、宮重謙輔、コレガ設立者代表トナリ一同ノ協賛ヲ経テ、旧一宮病院ヲ校舎に充テ如上ノ目的ヲ以テ実業学校設置ノ件ヲ県知事ニ具申シタルニ同年五月四日認可セラレタリ」

同年五月十日に開校式が行なわれ校長には法学博士志田鉀太郎が推薦され、職員には、

池田寿太郎(商学士)、木島菊雄(法学士)、細谷忠男(元税務署長)
田中美也司(商科大教諭)、斉藤来助(中学校教諭)、石橋茂助(茂農卒)、片岡仙蔵(千葉中卒)、中島勉(千葉医専卒)

の八氏が就任、同校顧問として、商業博士石川文吾、法学博士中村進午、理学博士松村任三、法学博士遠藤源六が推薦された。

五月十三日より授業が始められ、当時生徒数は、予科一年一五名予科二年二一名、本科一年三一名、計六七名であったが、翌十五年四月には、予科一年三六名、予科二年三四名、本科一年六〇名、本科二年二六名、計一五六名に増加した。

十四年九月二日に同校校務委員として、田中周、高梨金次郎、片岡尚文の三氏が委嘱された。

昭和二年四月に甲種実業学校として文部大臣より認可され、同三年七月一日町立に移管し、一宮町立一宮実業学校と改称した。

その後、同年には体育館と武道場を新築、同五年には一宮女学校の校舎を移築、同七年には千葉市所在の教育会館を移築し、施設、設備の充実をはかった。

昭和十一年四月一日、認められて県立に移管され、千葉県立一宮実業学校となった。

当時は、農商共に学んだが、特に商業実習で罐詰やびんづめの製造と貝細工の加工を行ない、一宮名物として観光に役立っていたといわれる。

戦後、新学制の実施と共に、昭和二十三年四月一日、千葉県立一宮実業高等学校と改称、さらに、同二十五年四月一日、高校再編成により、千葉県立長生第一高等学校商業課程(一宮校舎)となったが、町及び学校関係者の強い独立の要望が、昭和二十八年四月一日実現し、千葉県立一宮商業高等学校になった。

翌二十九年校舎老朽のため解体し、同三十三年まで年次計画によって、普通教室・特別教室等を新築。同三十七年、運動場狭隘の為一宮町蔵王周辺の水田・畑・山林等四、三三一坪を買収し、新運動場が完成した。

当校は、自治・責任・創造を校訓とし、信義を重んじ、真理を愛好する信念の人、健康明朗で責任を完遂する人、進取の気象に富み、勤労を愛好する経済人の育成を教育目標として、鶴岡彌後援会長作詞の校歌の基に益々発展している。

緑かわらぬ　玉前の森
潮は映える　九十九里
山河明るく　気は高し
仰ぎ見る　自治の学舎
希望に燃えて　集う我等

歴代校長は次のとおりである。

志田鉀太郎　大正十四年五月～昭和十一年三月
多久　三雄　昭和十一年四月～〃　十五年三月
横橋　保　〃　十五年三月～〃　十五年九月
畠山　廉　〃　十五年九月～〃　二十年十一月

鈴木　重治　昭和二十年十一月～〃　二十三年三月
加藤　貞男　〃　二十三年四月～〃　二十五年三月
今　惣吉　〃　二十五年四月～〃　二十七年三月
林　信義　〃　二十七年四月～〃　二十八年三月
梶原　昌夫　〃　二十八年四月～〃　二十九年三月
丸島　茂　〃　二十九年四月～〃　三十一年九月
秋山　豊　〃　三十一年十月～〃　三十五年三月
関　英一　〃　三十五年四月～現在

昭和三十七年度現在では、在籍生徒数は、男二七八名、女三四二名、計六二〇名であり、通学地域別は別表のとおりである。

市町村名	生徒数	市町村名	生徒数
一宮町	90	大原町	54
茂原市	132	夷隅町	16
睦沢村	49	御宿町	18
長生村	46	大多喜町	4
白子町	31	天津小湊町	5
本納町	35	鳴川町	4
長柄町	17	東金市	1
長南町	32	芝山町	1
勝浦市	51	市原町	1
岬町	33	計	620

実業補習学校・青年訓練所　教育制度の過渡期が終り、大正年間になると教育が盛んになり、義務教育終了後、勤労に従事する青少年問題が重視され、各町村に実業補習学校が小学校に併設されるようになった。

予科二年・本年三年にわかれ十一月から三月までの農閑期を利用、夜間三時間程度の授業が行なわれた。

一宮農商補習学校は大正八年に開設され、昭和二年度には六三名、同五年度には四五名の在籍者があった。

青年訓練所は大正十五年青年訓練所規程が公布され、勤労青少年に軍事訓練を教える事を目的として小学校に併置された。

その後、実業補習学校、青年訓練所も同年層の青少年を対象としたため困難を伴い、昭和十一年法令改正により両者が統一されて、青年学校が設けられた。

昭和十九年三月、学制の改正により青年学校は独立されたが、同二十二年四月閉校となった。

当時の学級は予科二年・本科三年・研究科一年であり、教練・公民・歴史・国語・数学・理科・家事・裁縫等を教えた。

歴代校長(独立より)

東浪見青年学校
塚本　宗臣　国民学校長兼務
川崎　和美　昭和二十一年三月～昭和二十二年四月

一宮青年学校
林　庚子男　昭和十九年三月　～昭和二十一年三月
石井　俊司　〃　二十一年三月～〃　二十二年四月

教育委員会　明治以来、教育行政の中央機関として文部省の権限は大きかったが、戦後、教育の民主化と教育行政の地方分権が論じられ、昭和二十三年教育委員会法の制定されるにおよび、同年十

一月千葉県教育委員会が、また同二十七年十一月に市町村教育委員会が設置された。

当地域においても東浪見村教育委員会・一宮町教育委員会が発足した。

委員は五名で組織され、当初においては委員中の四名は住民の直接選挙により選び、一名は議会の選出であったが、その後法令の改正により全員議会の承認を得て、市町村長の任命制になった。

発足当時の委員

東浪見村　秋場　淳　　一宮町　斉藤　信

田中喜三郎　　津川　美斉

小関　一郎　　永島　嘉男

中田　孝　　中村　歌子

鵜沢　長蔵　　風袋　義次

（議会選出）　　（議会選出）

昭和二十八年十一月東浪見村と一宮町の合併の結果新委員は次のとおり決定

秋場淳、小関一郎、津川美斉、斉藤信、風袋義次（議会選出）

その後、森田文蔵（議会選出）鈴木東涯、小林喜一が就任し、昭和三十八年七月現在は次のとおりである。

秋場淳、津川美斉、斉藤信、田中広俊

社会教育　江戸期より明治にかけては社会教育といわれるものはなく、房総各藩の諸教令・救育施設・種痘施設・五人組制度・明治六年の改暦等、社会事業的なものが多かった。（一宮藩の諸教令は明治二年に布告された）

明治となり学校教育制度が確立されると、青少年団体及び婦人団体の結成がすすめられ、明治四十一年に一宮町青年会が、同四十三年には一宮町処女会と婦人会が発会し、大正五年に東浪見村青年会が、翌六年には処女会が発会し、諸団体を中心として社会教育が行なわれた。

大正十三年に始めて文部省社会教育課が設置され、逐次社会教育は進展した。

その後、勤労青少年の研修機関として、実業補習学校・青年訓練所が各町村小学校に併置され、義務教育終了後の勤労青少年の教育が行なわれた。

昭和十二年支那事変が始まると、戦時体制組織となり、国民精神の昂揚・社会道徳の振興・公私生活の刷新等が叫ばれ、事業内容も戦事一色となり、昭和十七年、青少年団体、婦人団体は大政翼賛会の傘下となるにおよんで、本来の社会教育活動はなくなった。

昭和二十八年八月、終戦を契機に新しい社会教育振興の機運がおこり、青年団、婦人会の復活とともに、公民館・婦人学級・青年学級・成人学校等が運営または開講され、益々進展している。

現在の社会教育委員は次のとおりである。

岡沢太兵衛、秦守彦、石井勇、中村精司、秋場蔵夫、渋谷光正、伊藤喜代、近藤倫代、志田喜努枝、白井きく、武田亮太、白鳥徳衛、小高精司

一宮学園（社会福祉法人）　大正十五年八月財団法人児童愛護会

により虚弱児の収容施設として一宮学園が設置され、翌昭和二年三月、三井家から町に寄附の敷地その他約一三、〇〇〇坪に総工費約二五万円による鉄筋コンクリート造り本館延二一一坪の学舎・病棟・寮舎・食堂・炊事場等が完成した。同年六月四日、宮内大臣代理関谷次官、内務大臣代理警保局長、千葉県知事、茨城県知事、埼玉県学務部長、三井家矢野理事、志田博士等の来賓多数が出席して開園式が行なわれた。当時の千葉毎日新聞をみると「一宮に誇りを添へた日本国中に只一つの一宮学園」とあり近代的な施設・設備をたたえている。

その後、昭和二十七年に財団法人より社会福祉法人に改められ、当初の定員一〇〇名から一九七名に増員されている。

収容児童の教育については、昭和二年三月私立尋常高等小学校が併置され、昭和十六年三月国民学校令により国民学校と改称、昭和二十三年三月法の改正により私立養護学校として認可され、虚弱児の特殊教育をしている。